

『君で満ちる空の器』

著：切江真琴

ill：ためこう

わかっているのに。

いつもいつも、むかつくとわかっていて会おうとする自分が、相原には理解できない。

放っておけばいいのだ。皐月が彼氏に誤解されようが、久々津がいつまでも元彼のことを引きずって皐月に泣きつこうが、相原にはまったく、かけらも関係ない話なのに、どうして首を突っ込んでしまうのだろう。

「……皐月はなんか、あんたが強がり言ってるとかいって相談乗ろうとしてたみたいだけど。一体何相談するつもりなんすか。いい歳して、自分で解決できねえの」

久々津をいじめたいとおもっているわけではないのに、口から出るのはこんなきつい言葉だ。

皐月にメールしてもらえばよかった、と今更ながらに思う。久々津に逃げられたくないからメールせなかつたのだけれど、逃げてくれていれば、こんな嫌な口をきかずにすんだ。

でも、ないものねだりする自分も予想がつく。逃げられたらむかつくし、そのまま待たれていたら、逃げるまでもない相手と認められたようでまたむかつく。

自分は、久々津が何をしたら満足なのだろう。

「皐月のこと電話一本で振っついて、よくまあ相談なんかできたもんだよ」

「それは……ごめん」

俯く久々津は相原を見ない。こっちを向けよと思うが、久々津がこちらを見たら見たで自分はむかつくのだろう。胸の中の重苦しいちりちりする苛立ちが全然止まらない。

もう、相原の家への道も久々津の家への曲がり角も過ぎた。どこかもう少しちゃんと話せる場所、と考えて、このまま道なりに歩いて曲がった先に公園があったことを思い出す。久々津には告げず、勝手にそこを目的地にした。

しかし、何を話すというのか。皐月とはもう会うなと通告でもするのか。

皐月のことばかりだと久々津に言われるわけだ、と相原は口元だけで笑った。

「俺、女の子とちゃんと付き合ったことないんでわかんないんすけど、ふつーお別れってそういうものなんですかね」

「……僕も人と付き合ったのは初めてだったから……」

「ふうん。オトコ出来たら、人生初の彼女も電話一本でサヨナラできちゃうもんなんだ」

「それは……っ」

異議があるように相原へ向けて何かを言いさした久々津が、目が合う前に正面へ向き直り肩を落とす。

「……言い訳に聞こえると思うけど……、皐月ちゃんと別れるように電話を入れさせたのは、あの人がだった」

「……は？」

「断ったんだよ。最初は、皐月ちゃんと別れる気なんかなくて断って、だけど……押し、切られて」

「はああ？」

久々津に対していつも感じるむかつきとは別種の怒りがその男に湧いて、相原はそれを声に露わにする。

「待てよ、んじゃあんたに別れようって言われて泣いてる皐月の声、そいつ聞いてたんすか。あんたはそんな男と……」

「ごめん……！ ごめんなさい、ほんとにごめん……！ ……だから、だから皐月ちゃんにはまともなこと言えなくて、すぐ切ったんだ、そしたら一馬くんが来て」

相原の詰る言葉を遮り久々津が謝る。

皐月を嘲笑うような真似をしたその男も、諾々と別れ話をした久々津にも腹が立って相原は、立ち止まってうつむく久々津の左肩を掴んだ。びくりとして目を上げる久々津を正面から睨みつける。

「俺が行った時、じゃあ、あの男まだあんたの家にしたのかよ。まさか無関係な弟が出てきたとかいって、それでまた皐月のこと嗤ったりしてないだろうな」

「ない、そんなことしてない……っ！ 一馬くんが来たときはもう、あの人は帰って……」

「口じゃなんとでも言えるだろうよ」

自分のせいで、皐月が弟まで使ううざい女と嘲笑されていたりしたら嫌だ。皐月はたしかに惚れっぽいけれど、ちゃんと本気で人を好きになる、姉ながらかわいいやつなのだ。もし笑いものにされていたらと思うと、そんなふうにな人の気持ちをつぶすのを楽しむような、夕子の悪い男に引っかけた久々津に心底腹が立つ。皐月を踏みつけにして久々津を手に入れたくせに、その久々津をさっさと放り出した男の汚さにも怒りがこみあげる。

何より自分のあのときの衝動に、相原は腹が立った。会ったって後悔するだけなのに、あの時の自分は

そんなことも知らずにただ久々津に会いたくて行ったのだ。

「ていうかさ」

そうだ、とあの冬の日の久々津を思い出す。

相原が、他に本命がいるんじゃないかと勘付いたのは、久々津が妙に浮ついた空気を纏っていたからだ。別れ話をして女の子を泣かせた神妙さの裏側で、確かに久々津はなにかふわふわと丸い空気を醸し出していた。

「あんた、今はそうやって謝ってるけど、あの日すげー嬉しそう感じしてたよ。なんか浮かれてんなって—あんたのことなんかほとんど知らない俺が気がつくくらいにさ。そんなに、その男にOK貰って嬉しかったの。皐月が泣いてても俺が怒っててもどうでもいいくらい嬉しかったのかよ。そんなに」そんなにその男が好きなのわけ？

自分が言おうとした言葉に胸を衝かれて相原は息を呑んだ。そんなことを訊いてどうなるというのだろう。

頷くな、と相原は願う。

久々津の口から出る、好きだという言葉が、相原には耐えようもなく汚らしく聞こえるから、聞きたくない。その男が今でも好きだなんて言われたら、いつも感じるあのむかつきで、この胸がどれくらい重くなるか想像もつかない。

—……どうして重くなる。

皐月のため？ そんなはずがない。皐月はもう久々津のことは吹っ切っている。久々津とその男のことを、いつまでもいつまでも引きずっているのは……自分だ。

相原の剣幕に圧されたかのように、顔を上げた久々津は目を瞠っている。西日に照らされて、眼鏡の奥の瞳は焦げ茶より明るい、紅茶のような色になる。こんなに真正面から、まじまじと久々津を見たのは初めてかもしれない。

夕方の空を映し込む、きれいな目。

ふと、向かい合い、久々津の細い肩を掴んでいる自分の手が震えていることに、相原は気づいた。怒りのせいか、手のひらの中の肩が思った以上に細いせいか。それとも——初めて久々津に触れたことを、意識したせいか。

途端に、自分でもおかしいくらいに久々津の体温が気になった。自分よりも熱い体温に、なんだか侵入されているような錯覚を抱いてしまう。

痺れるように震える自分を知られまいと、相原はゆっくりと久々津の肩から手を剥がした。それでもまだ残る、得体の知れない疼きに、強く拳を握る。

そんな相原を見て、久々津は縋るものがなくなったような顔をして視線を揺らがせた。

「……確かに、浮かれてたかもしれない……。初め、電話したくないって言った僕に、あの人は——……キスした」

胸が、重くなるより先に、内側から殴打されるようにむかついた。

「それで……それで、僕は納得しちゃったんだ。僕が好きなのは男の人なんだって、納得して、だから……皐月ちゃんに、電話して」

ありったけの軽蔑をこめて、「へえ」と一言発だけする。この一言で、久々津が傷つけばいいと思った。

ほんとうに、俺は厭なやつだ。

憤らしく荒れそうになる呼吸をどうにか制して、相原は久々津に背を向ける。握りこんだ拳の中、爪が掌に突き刺さって痛い。さっき噛んだ唇の内側の傷にもまた歯を立ててしまった。血の味に、少しだけ冷静になる。

無言で歩き出すと、後ろに久々津の気配を感じる。

どうしてこんないやな目に遭っているのについてくるのだろうか。自分のことなど放って帰ってしまえばいいのに。でも、もしも久々津が背を向けたら、相原は追いかけてそれを語るような気もする。

ふと理解する。

久々津がついてくるのは、相原の心情を慮ってのことではない。久々津は、相原が皐月のために行動しているのだと思っているから、ついてきているのだ。皐月のことで話があるならば、聞かなければならないと、半ば義務のように感じているのだろう。不実に捨てた皐月に、今更縋ったことを悪いと思っているから、相原に詰られても耐えて、皐月への誠意のために、相原に従っているのだ。

そう。久々津にとって、相原自身には、なんの意味もない。そう理解した途端、あんなに熱く荒れていた胸はずうっと冷えた。

久々津の前で、相原が『相原一馬』であったことはないのだろう。

最初は彼女の弟。次は、元彼女の弟。今は、頼れる女友達の弟。

ずっと相原は、久々津は自分に関係のない人だと思おうとしてきた。関係ない人のことで苛立つのは気持ちの無駄遣いだと、そう思ってきた。

逆だった。自分にとって久々津が無関係なのではなく、久々津にとって自分は無意味な人間だったの

だ。
なんだか、肩からがっくり力が抜けた。
横断歩道を渡ろうと信号待ちをすると、無言のまま久々津が隣に立つ。
本来、こうして久々津と連れ立って歩く権利すら自分にはないんだと思うと、おかしくなってきた。無関係な人間にこんな横柄な態度を取られるなんて、久々津もとんだ災難だ。
通りを渡り横道へ入り、すぐのところにある世田谷線の踏切を渡って、住宅街の中の道を歩く。
心の中、相原は皐月にごめんと謝る。あんなに何度も、久々津を慰めてやさしくしてくれと頼まれたのに、全然できない。
何も言えないまま歩く道の先、四ツ辻の向こうの角に、小さな森のように木が茂っているのが見えた。目指していた公園に到着した。

戦国時代だかの城跡の一部だというその公園は、木が鬱蒼と茂った小さな丘のようにになっている。陽も落ちかけの上、樹木が繁り薄暗いせいかひと気はあまりない。
坂と階段をいくつか上った先にあるベンチに、相原は腰掛けた。相原の落ち込んだ気分と裏腹に、完全に日が暮れるまでは頑張ると言わんばかりにセミが鳴いているのが煩わしい。
少し間を空けて久々津もおずおずと座った。腿の上では手が拳を作っている。何を言われるかと緊張しているのかもしれない。けれど相原には、どこに着地するための話し合いなのかなんのプランもない。何を話せばいいのだろうか。
皐月と会うな？ 皐月にもう迷惑かけるな？

ハイわかりました、と言われたらもうそこで相原と久々津の接点はなくなる、そんな話をしに来たわけではない。
ただ、皐月と久々津を会わせたくなかっただけだ。皐月と会おうとする久々津に腹が立って、自分が来た。
その理由を——考えるのは、こわかった。
ぼんやりと、さっき拳を握り締めた掌を、開いて見る。爪の痕はまだくっきり残っている。

「……ごめんね」
不意に久々津が言った。
びくりと、相原は顔を挙げ久々津を見た。久々津は、自分の組んだ手に視線をおろしたまま小さく呟く。
「……皐月ちゃんがやさしいから、甘えてた。もう」
「あんたさ」

慌てて相原は遮った。久々津の言葉は多分、皐月とはもう会わない、と続くはずだ。それは阻止しないとならなかった。
久々津が皐月と会わない、と約束すればすべて終わる。
自分と久々津とは、皐月という点で繋がっているだけだ。皐月という人間を久々津が切り離したらもう、相原は真実、無関係な人間に成り下がってしまう。
理由は明確にわからないのに、それだけは、いやだった。

「あんた……あの男との関係、どうなってんすか」
「どう、って……皐月ちゃんから、聞いてないの」
「えらい人の娘と付き合うからってあんたがふられた、ってのは聞きましたけど。それより前の……、話ですよ。どうしてそいつに、告白なんかしたのか……とか」
聞いても苛立ちしか覚えない話題なのに、他に話すような事柄がない。久々津のことを何も知らないから、他に尋ねることがない。
相原の意図を探るように窺い見ていた久々津が、諦めたようにふっと小さく息をついて口を開いた。

「……結城さんは、高校入ってからの家庭教師だったんだ。本当に勉強を見るだけの人で……、一緒にごはん食べたりとかもなくて、なんていうかプロっぽくてかっこいいって思ってた」
「まさかそれで告白したんすか？ ただの憧れレベルじゃない？」
「それは……それだけが理由じゃ、ないから」
「理由？」

先を促すと、躊躇うように久々津は俯いた。
「あの……。高二のとき、結城さんが——男の人と、キスしてるのを見て」
「は？ ……どこで」
「僕の部屋から公園が見えるんだけど……そこで」
「……俺の嫌いなタイプ」

げんなりして相原は呟いた。周囲がまるっきり気にならなくなるほどの気持ちの盛り上がりなんて、そうそうあるわけがない。いわゆる『路チュー』は、周りに見せ付けたいやつらのすることだと思っている。

「そういうの見たの初めてで、すごく驚いた。それに、思い出すたびどきどきして。……僕が女の子にあんまり興味ないのは、男の人が好きだからなのかなって思ったんだ。でもクラスの友達に何か感じるとかはなくて……どきどきするのは、結城さんたちを覗き見したのを、思い出したときだけだったから。だからもしかして、僕は結城さんを好きなのかな、って思って……」

結局二ヶ月悩んだ挙句、告白したのだという。

なんでそうなるのだ。

相原はむかつきを通り越し呆れてしまう。他人の情事を覗き見た背徳感で興奮しているだけだと、なぜその方向で納得できないんだろう。

「で？ 告白には返事がなかったのにあんたが皐月と付き合い出したら、やさしくしてきた、って？」

「……うん」

なんだかおかしい話だ。

皐月がふられた日、久々津は、二年間ずっと好きだった人に好きだと言ってもらえたと言っていた。しかし今こうして話を聞いてみると、久々津と男の『好き』という気持ちに対する認識が違いすぎている気がしてならない。

「あの……誤解してないとは思うけど……皐月ちゃんと付き合ってるときは、あの人は、ほんとにただの家庭教師と生徒だったから……」

「そんなところは疑ってないすけど。んで？ 皐月が別れ話されるとこ聞きたがるようなそのサド男と、あんたは正式におつきあいすることになったわけっすね」

「正式……」

相原の言葉を鸚鵡返しして、久々津は、まるで痛いところでも突かれたかのように眉根を寄せた。

「正式なおつきあい、って……なんだろう」

「そりゃあ、デートしたり。男女なら親に挨拶したりもするかもですけど」

「デートって、どんなことするの」

「はあ？」

なにを今更言っているのだろう。

「飯食ったり映画見たり買い物行ったり、まあえっちしたり。ゲイだって変わらないでしょ。ていうかあんた、皐月との約束キャンセルしてその家庭教師とデートしてたじゃないかよ」

「……そういうのは、皐月ちゃんとの約束を潰したいときにしか、してくれなかった」

「なんだそれ。どういうことすか」

尋ねながら、相原の中にはとある疑念が広がる。

普通のデートとはどんなものかを問うて来る久々津。自分がしていたのが、普通じゃないデートだったと思っているからこそ出てくる疑問なのではないか。だとしたら、それが意味するところは。

ひどく辛そうに、言葉にすること自体を痛みとして感じているかのように、久々津はひそやかな声で囁いた。

「僕がしたことのあるのは……、そういうことするだけのデート、だった」

「あー……」

久々津の話は、いやな予感ばかりが当たる。

そういうことをするだけ。

セックスするだけの、デート。

胸が鉛のように重くなる。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>